

「あとがき」

天川貴之という名は、主として「哲学者」として「人名録」等に挙げられているものである。しかし、理性ばかりではなくて、感性的な分野も大切にしてゆきたいと願っているものである。それが、私の場合、「詩」の世界であったり、「短歌」の世界であったり、「俳句」の世界であったりするのである。

この度、「詩歌集」が出版されることになって、一冊の本になる程の恋愛をしたことも、「生きた証」なのだとつくづく思った。

感性の輝きという観点からみれば、十七歳前後は、「魂」が限りなく純粹に飛翔してゆくべき時期であると思う。

私は、高校時代からゲーテ等を愛読していたが、今なおゲーテ等を愛読しているところをみると、人生観や世界観の中軸は、そう変わるものではないのではないかとも思えてくる。

ゲーテであっても「若きウェルテルの悩み」がなければ、その後に、哲学者、思想家として大成してゆかれたであろうか。

限りなく「魂」が透明であることを探究し、純粹であることを探究し、美そのものを探究し、愛そのものについて探究してゆくことは、人間にとって生まれてより死ぬまで一貫したテーマであり、死後なおるべきテーマであるのではないのかと思うのである。

「魂」において愛することは、永遠普遍の公案でもあろう。そして、春、桜の咲く度に、美や愛そのものの価値観を問い合わせてみるのである。

この詩歌集が、読者の恋愛観を豊かにするための素材となるのならば、この上ない幸いである。

JDR総合研究所・代表 天川貴之